Modern Beauty

【報道に関するお問い合わせ】
ポーラ美術館　広報事務局　担当：森下、川島
TEL.03-3407-5780 ／ FAX.03-6869-3533　Mail：press@epochseed.jp
ポーラ美術館　広報担当：中西
TEL.0460-84-2111 ／ FAX.0460-84-3108

Press Release
【報道関係者各位】

2016年2月

Modern Beauty

フランスの絵画と化粧道具、ファッションにみる美の近代

会期：2016年3月19日（土）―9月4日（日）

休室：6月16日（木）

ポーラ美術館
POLA MUSEUM OF ART

～今も色褪せずに女心を躍らせる、フランスのファッションとメークの世界～

ポーラ美術館では、財団設立20周年を記念して、コレクションの特徴のひとつである「女性の美」に焦点を当てる展覧会を開催いたします。

社会構造や人々の生活を激変させた産業革命の波は、19世紀フランスのファッションにも大きな影響を与えました。それは、紡績機や織機の改良、縫製技術の発展や百貨店などによる流通の拡大といったことはもちろん、ファッションメディアの発達により流行情報の拡散のスピードや鮮度とその広がり方にも変化を与えました。また、時を同じくして19世紀以降の画家たちに影響を与えた美術批評家で詩人のシャルル・ボードレールが、芸術において移ろいやすいものや一時的なもののなかにある「近代性」（モデルニテ）を描くことを称揚したことで、時代ごとに変わりゆく都市風俗は新たな絵画の主題となりました。なかでも、流行を映し出す女性たちのファッションは重要な主題のひとつとなり、密室で行われる女性の化粧や身づくろいなどの場面も数多く描かれるようになりました。

本展では、ポーラ美術館が収蔵する19-20世紀の絵画を中心に、同時代のファッション雑誌やファッション・プレート、装身具、化粧道具、ドレスなどをあわせて展示し、女性たちのファッションや化粧が画家たちによってどのように描かれたのかを検証しつつ、その背景や意味について考えます。

100年前の女性たちの「美」へのこだわりを、これまでとはひと味違った形でご紹介いたしますので、ぜひお楽しみください。

Modern Beauty ―フランスの絵画と化粧道具、ファッションにみる美の近代

- 会　　期：**2016年3月19日（土）―9月4日（日）　休室：6月16日（木）**
- 主　　催：公益財団法人ポーラ美術振興財団　ポーラ美術館
- 協　　力：文化学園服飾博物館、ポーラ文化研究所
- 出品点数：212点（会期中、展示替えをいたします。詳細はお問い合わせください。）
- 出品作品：絵画、彫刻、版画、雑誌、ガラス工芸、ドレス、装身具、化粧道具
  ＊2016年はポーラ文化研究所が設立40周年、ポーラ美術振興財団が設立20周年にあたります。
  ＊本展覧会では、SNS展開用写真ブースなどを設置します。
- 会　　場：ポーラ美術館（〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285）
  Tel. 0460-84-2111/ Fax. 0460-84-3108
- 開館時間：午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
- 入 館 料：

エドゥアール・マネ《ベンチにて》
1879年　パステル / カンヴァス

	個人	団体（15名以上）
大人	1,800円	1,500円
シニア割引（65歳以上）	1,600円	1,500円
大学・高校生	1,300円	1,100円
中学・小学生	700円	500円

※ 料金はいずれも消費税込み。
※ 中・小学生の入場については、土曜日は無料です。
※ 中・小学生が授業の一環として観覧する場合、中・小学生及び引率教員の入場は無料です。

関連イベント開催予定

本展では関連イベントの開催を予定しております。
■講演会「モードが20世紀をつくった。」3月26日（土）14：00-15：30（開場13：30）
■ワークショップ「カッティングシートでオリジナル傘をつくろう」6月（予定）
■ワークショップ「香水づくり講座」6月（予定）
■「ポーラ美術館アートクラフト市」（仮）GW中開催（予定）
詳しい説明は裏表紙をご覧ください。
また、詳細が未定のイベントは、決まり次第HPにてお知らせいたします。

本展のみどころ

1 「つかのまの美＝ファッション」から永遠を見出す「近代の美」の変遷 絵画を彩る「ファッション」からみる100年間のモードと女性たち

詩人として知られるボードレールは、美術批評家としても強い影響力をもち、「一時的なもの」に「永遠」を見出し表現することを近代の美としました。
そして多くの画家たちも、流行にあわせて次々と変わりゆく女性たちのファッションを「一時的なもの」の最たるモティーフとして、最新のファッションを取り入れた女性たちを積極的に描くようになります。
本展では、19世紀後半から20世紀前半までの約100年間の間に描かれた様々な女性像を展覧し、ファッションの変遷を辿りながら、その背景にみられる女性の社会進出などの社会構造の変化もご紹介します。

①

②

①クロード・モネ《貨物列車》1872年　油彩 / カンヴァス
②《アフタヌーン・ドレス》1865-1870年 綿、絹、レース
文化学園服飾博物館　写真撮影：安田如水（文化出版局）

2 文化学園服飾博物館とのコラボレーションで実現、絵画から抜け出したトレンドファッション

本展では、絵画を中心にすえながら、ファッションの流行を広めるのに大きな役割を担った当時のファッション・プレートやファッション雑誌、その時代を彩ったドレス、化粧道具、髪飾り、扇、ジュエリーなどの装身具、香り、女性の装いのための必需品など、ファッションにまつわるあらゆる品々212点を展示し、ファッションの変遷を立体的に展覧します。
文化学園服飾博物館のご協力により10点のドレスが展示され、絵画に描かれている世界を再現します。

①ジュール・パスキン《ギカ公女》1921年　油彩 / カンヴァス
公益財団法人ひろしま美術館
②《イヴニング・ドレス》1923年頃　絹（ベルベット）、金属糸、ビーズ
文化学園服飾博物館　写真撮影：安田如水（文化出版局）

①

②

③

④

③《アフタヌーン・ドレス》1870-1875年　絹（オーガンジー）
文化学園服飾博物館　写真撮影：安田如水（文化出版局）
④クロード・モネ《散歩》1875年　油彩 / カンヴァス

3 現代の女性も、ときめきを感じずにはいられない。描かれた美女たちの秘密をのぞく、100年前の化粧部屋を再現

19世紀はファッションへの関心が高まる一方で、衛生への意識も高まり、入浴の習慣も生まれます。身づくろいや化粧を行う浴室や化粧部屋といったプライベートな場所は、他人を入れない秘密の空間でした。しかしながら、魅力的な女性の身づくろいの様子は、絵画の主題として数多く描かれています。本展では、19世紀の上流階級の女性の化粧部屋を工芸品や絵画や化粧道具などを交えて再現し、入浴や身づくろいの場面を描いた作品についてもご紹介します。

①

②

③

④

⑤

⑥

①ジュール・ジェーム・ルージュロン《鏡の前の装い》1877年　油彩 / カンヴァス　東京富士美術館
　© 東京富士美術館イメージアーカイブ / DNPartcom
②エミール・ガレ《女神文香水瓶》1884年
③エミール・ガレ《スグリ文香水瓶》1900-1904年
④オーギュスト・ロダン《ナタリー・ド・ゴルベフの肖像》1905年頃　大理石
⑤《あやめ文銀製化粧セット》1903-1907年　ゴールドスミス＆シルヴァースミス社
⑥《ティー・ガウン》1900年代　絹（サテン、シフォン）レース　文化学園服飾博物館　写真撮影：安田如水（文化出版局）

化粧部屋から垣間見る、貴婦人たちの一日

上流階級の女性たちは、時間によってファッションが決まっており、一日に何度も着替え、身づくろいを楽しんでいました。例えば、午前中はモーニング・ドレスで過ごし、ランチを過ぎればアフタヌーン・ドレスに着替えたそうです。さらに、夕方のティータイムにはティー・ガウンに装いを変え、その後には夕食を楽しむためにイヴニング・ドレスに身を包んだようです。
また、乗馬やテニスといった運動の場面ではもちろん専用の装いでプレイし、散歩の際には散歩用のドレスに着替えたといわれています。

4 世界的にも貴重な化粧道具コレクションを一挙展示！

ポーラ美術館とポーラ文化研究所では、古今東西の化粧道具のコレクションを多数収蔵していますが、今回はそのなかでも、Modern Beauty 展に相応しい、19世紀後半以降の絵画をより深く理解するための品々を選りすぐり、金や銀、ガラスなどを使用した贅沢な化粧道具セットや、モダンなシガレット付きのコンパクトケース、香水瓶をはじめ、髪飾りや扇などをご紹介します。また、あわせて化粧術についてもご紹介します。

①

②

③

④

⑤

①《珊瑚象嵌化粧ケース》19世紀中頃
②《イミテーションストーン装飾セルロイド製アメリカ櫛》1920-1925年頃
③《紐付スウェード製5種入りコンパクトケース》1920-1950年代　ブルジョワ社
④《レースの扇・ヴァイオリン奏者と妖精》1895年頃
⑤《蛇文香水瓶》19世紀後半

各セクションの概要

セクション１　ファッションと近代性―ボードレール、マラルメとファッション雑誌

19世紀フランスでは、産業革命によってファッションをめぐる状況が大きく変化しました。オートクチュール（高級仕立服）が誕生し、百貨店で既製服が買えるようになり、人気のスタイルがファッション雑誌などによって女性たちに広まるようになります。そこで、このセクションでは19世紀半ばから20世紀前半に刊行された雑誌や、当時流行の服に身を包んだ女性や近代化された都市や行楽地、市民生活の情景を描いた印象派のモネやシスレー、そしてルソーといった画家たちの絵画もあわせてご紹介します。

①

②

③

①ルイ＝ガブリエル＝ウジェーヌ・イザベイ
《テュイルリー宮殿庭園のマティルド皇女》1855年
油彩／カンヴァス　山寺後藤美術館
②《イヴニング・ドレス》1860年頃　絹、レース
文化学園服飾博物館　写真撮影：安田如水（文化出版局）
③クロード・モネ《サン＝ラザール駅の線路》1877年
油彩／カンヴァス

セクション２　近代性の表象―マネ、ルノアールと19世紀のファッション

マネやルノワール、モネなど印象派の画家たちが活動していた1860年代から1880年代は、女性のファッションがさまざまに変化した時期と重なっています。そこで、このセクションでは、当時の最新ファッションを描いた多くの画家たちの中から、ドレスや帽子でモデルを自らスタイリングしていたマネや、仕立屋の息子としてファッションに触れながら育ち、自身が所有するドレスをモデルに着せていたルノワールなど、ファッションへのこだわりという興味深い一面を持つ画家たちの作品を展覧しながら、同時代の美をご紹介します。

左から エドゥアール・マネ《イザベル・ルモニエ嬢の肖像》1879年頃　油彩／カンヴァス　吉野石膏株式会社（山形美術館寄託）
ピエール・オーギュスト・ルノワール《髪かざり》1888年　油彩／カンヴァス
ピエール・オーギュスト・ルノワール《レースの帽子の少女》1891年　油彩／カンヴァス

セクション３　生活と装飾―ファッションと化粧

当時の女性たちは一日の中で、さまざまな装いを楽しみました。朝、化粧部屋ではドレッシング・ガウンで身づくろいをし、室内では部屋着でくつろぎ、夜会などの外出時には華やかなドレスに着替えていました。しかし、画家たちは人目には触れない日常をも切り取るように、女性たちが他人には決して見せなかった化粧部屋や浴室での姿を描いています。
このセクションでは、身づくろいの場面を描いた絵画、版画と、同時代の化粧道具などの品々で、化粧部屋や女性たちの日常生活を再現した空間をご覧いただきます。また、100年前の女性たちの美へのこだわりもご紹介します。

①

②

①ピエール・ボナール
《浴槽、ブルーのハーモニー》1917年頃
油彩／カンヴァス
②《花文洗面セット》1910年代
マクシミリアン・ド・ベティニー社

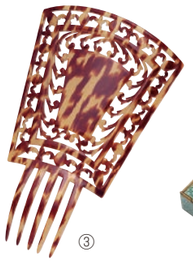
セクション４　解放された身体―世紀末から20世紀のファッション

女性の社会進出とファッションが深く結びついた20世紀。1906年、ポール・ポワレが発明したドレスは、女性をコルセットの苦しみから解放し、自由で活動的な生活とファッションを切り拓きました。その後、1914年に第一次世界大戦が勃発し、女性が働く機会が増えたことで女性のファッションはますます変化しました。このセクションでは、1900年代初頭から1930年代の女性像や、当時の人々の生活を描いた風俗画や風景画を特集し、時代のなかでファッションが社会や経済、文化などの外的な要因とリンクしながら変化していることを検証します。

ラウル・デュフィ
《ポワレの服を着たモデルたち、1923年の競馬場》
1943年　油彩／カンヴァス　石橋財団ブリヂストン美術館

①

②



③

④

①キスリング《ファルコネッティ嬢》1927年　油彩／カンヴァス
②《幾何学文様ビーズバッグ》1920-1930年代
③《セルロイド製スペイン櫛》1920-1925年頃
④《金属ベルト付５種入りコンパクトケース》1920-1950年

トレンド発信を支えたファッション・プレート

19世紀のパリでは、印刷技術の発展に伴い最新流行のファッションに関する定期刊行物、ファション雑誌等が次々と刊行され、流行がヨーロッパ各地に広まるようになりました。雑誌には流行のドレスや髪形、装身具などが描かれた「ファッション・プレート」が入っており、当時の女性たちのファッションのお手本とされました。この「ファッション・プレート」は、版画のポショワール技法やファッションを描くイラストレーターの登場により、単に流行を広めるだけにとどまらない、アートの域にまで成長していきました。

1 『ル・サロン・ド・ラ・モード』（LE SALON DE LA MODE）

フランスで刊行された週刊のファッション誌。

1890年代の髪型とドレス
『ル・サロン・ド・ラ・モード』
1890年代

2 『シック・パリジャン』（CHIC PARISIEN）

1899年-1938年までウィーン、パリ、ブリュッセル、ロンドンなどで発行された年刊のファッション誌。

左から 1910年代のアールヌーヴォー・スタイルのドレス『シック・パリジャン』1910年代
1910年代のサロンに憩う女性とエスコートする男性『シック・パリジャン』1910年代

3 『ガゼット・デュ・ボン・トン』（GAZETTE DU BON TON）

1912年-1925年（1925年以降は「VOUGE」に吸収）。「今世紀最大のモード誌」と評された高級ファッション誌。モダンなライフスタイルの紹介や一流の執筆陣による読み物も掲載されました。ポショワール技法による版画のイラストを駆使し、高級ファッション誌の分野を確立しました。

1910年代のファション「新しいネックレス　ポール・ポワレのイヴニングドレス」
『ガゼット・デュ・ボン・トン』1914年

コート・ダ・ジュール、テラスでの宴『ガゼット・デュ・ボン・トン』1915年

舞踏会での恋を紡ぐ、扇の秘密

当時の扇は、実用的な用途よりも、ファッションのアクセントやコミュニケーション・ツールとして使われていました。そのなかでも、恋愛のコミュニケーションを支えた「扇ことば」は非常に人気で、19世紀にまずスペイン語で手引書が出版され、その後ドイツ語、英語に翻訳されるほどでした。当時は、出会いの機会が非常に限られていた上、恋人や婚約者同士が2人きりになれなかったため、暗号での意思疎通をはかっていたといわれています。そのため「扇ことば」は、舞踏会で求婚可能な男性が、婚約も結婚もしていない女性を即座に見つけ、自分の求愛が歓迎されるかどうかわかるほどに発達したと言われています。古今東西、恋にまつわる様々な努力が繰り広げられていたのですね。

《デュヴェルロワの扇・散歩風景》1870年頃
デュヴェルロワ工房

・扇で頬を横になぞる	あなたを愛してる
・扇を閉じたまま見せる	私のこと愛してる？
・扇で両目を横になぞる	ごめんなさい
・扇を落とす	友達でいましょう
・扇で手をなぞる	あなたなんか大嫌い
・扇の取っ手を唇に	私にキスして

1880年代の髪型とドレス『ル・サロン・ド・ラ・モード』1880年代

ポショワール技法とファッション・プレート

ポショワール技法とは、紙の上に型紙をのせ、刷毛などを用いて彩色する版画技法のことです。複雑で微妙な色彩が再現できますが、熟練した職人が分担して刷るために大変な手間と費用がかかる贅沢なものでした。
ファッション誌で高価なポショワールのイラストが流行した背景には、コルセットを脱したドレスを発表したポール・ポワレがいちはやく採用して成功を収めたことがあります。彼は自分がデザインしたドレスの革新的な魅力を伝えるには、細部の再現より、服全体の印象が重要だと感じ、ポショワールでのイラストを採用し好評を博しました。
これにより、ファッションを描くイラストレーターが活躍し、ファッション・プレートの流行に大きな役割を果たしたのです。

パリジェンヌのトレンドを映したマネ

上流家庭に生まれ、洗練されたダンディな男性であったマネは、女性のファッションにも関心があり、最新のファッションに身を包んだ女性像も多く描いています。婦人服店でモデルとともに服を選ぶこともあったようです。
《ベンチにて》のモデルは女優で高級娼婦のジャンヌ・ドマルシー。ここでは、画材にパステルを使用することで、ファッションだけでなく、メークをした女性の肌も表現されています。なめらかでマットな画肌が表現できるパステルは、女性のやわらかな肌の表現に適しており、マネも意識して用いたのでしょう。

エドゥアール・マネ《ベンチにて》1879年　パステル / カンヴァス

化粧道具の変化

化粧道具は、時代の社会背景や生活習慣、化粧や髪型の流行などを反映しています。かつての化粧道具には、金、銀、象牙などさまざまな素材が使用され、王侯貴族やブルジョワ階級にとって、豊かな化粧セットはステータスシンボルとなっていました。しかし、20世紀にはいると、旅行やスポーツの普及、第一次世界大戦を契機に女性の社会進出が進み、化粧道具もファッションと同様に、豪華なものからコンパクトで機能的なものへと移り変わっていきました。

❶**《あやめ文銀製化粧セット》**
立ち鏡をはじめとした28点の化粧セット。アール・ヌーヴォー様式のデザインで、セットの内容は当時流行のファッションや化粧、髪型などを反映しています。ここまで点数が揃ったセットは類を見ないもので、このセットは富裕な階級の注文品であったと考えられます。
皮手袋の指の形を整える「グラブストレッチャー」、熱したコテで髪にウェーブをつける「アルコールランプ付折りたたみコテ」のほか、移動時に身だしなみを整えるための「ケース付時計」もあります。

《あやめ文銀製化粧セット》1903-1907年
ゴールドスミス＆シルヴァースミス社

❷**《金属ベルト付５種入りコンパクトケース》**片面はフェイスパウダー、頬紅入れの周辺には櫛、口紅を入れていました。もう片面のシガレット入れ下部にはマッチも入っていたようです。手持ち用の鎖ベルト付き。

❸**《ライター型４種入りコンパクトケース》**フェイスパウダー、ローズ色の口紅、香水アトマイザー、紅筆入れが入っていました。人前でも使用するため、コンパクトには、見せるという意味合いも含んだデザイン性が求められました。

1890年代の身支度
『ル・モニトゥール・ド・ラ・モード』1895年

左から1910年代の身支度・コンパクトの化粧直し『ガゼット・デュ・ボン・トン』1914年
《金属ベルト付５種入りコンパクトケース》1920-1950年
《ライター型４種入りコンパクトケース》1928年頃　ダンヒル社

Modern Beauty 展関連イベント

本展では関連イベントの開催を予定しております。
イベントは、決まり次第 HP にてお知らせいたします。

（1）講演会「モードが20世紀をつくった。」

日時　3月26日（土）14：00-15：30（開場13：30）
会場　ポーラ美術館講堂
講師　鹿島茂（フランス文学者、明治大学国際日本学部教授）
定員　先着100名
料金　無料（但し当日入館券が必要です。）

© 白鳥真太郎

（2）「カッティングシートでオリジナル傘をつくろう」

半透明のカラフルなカッティングシートを、ビニール傘に切り貼りしてつくるワークショップ。
日時　6月（予定）
会場　ポーラ美術館
詳細は決まり次第 HP でお知らせします。

（3）「香水づくり講座」

数種類の香料を調合してオリジナルの香水をつくるワークショップ。
「いい香り」の香水を調合するには、知識と経験が必要ですが、
初めての方でも失敗しない香りの香水を作る方法で特許を取得している
（株）ポーラ化成工業から講師をお招きします。
日時　6月（予定）
会場　ポーラ美術館
詳細は決まり次第 HP でお知らせします。

①エミール・ガレ《女神文香水瓶》1884年
②エミール・ガレ《スグリ文香水瓶》1900-1904年
③《蛇文香水瓶》19世紀後半

（4）「ポーラ美術館アートクラフト市」（仮）

日時　GW 中開催（予定）
会場　ポーラ美術館エントランス向かい広場
詳細は決まり次第 HP でお知らせします。

【問い合わせ先】
ポーラ美術館広報事務局　担当：森下、川島
TEL. 03-3407-5780 ／ FAX. 03-6869-3533 Mail：press@epochseed.jp
ポーラ美術館　広報担当：中西
TEL. 0460-84-2111 ／ FAX. 0460-84-3108

＊表・裏表紙のクレジットは上から下の順で
【表紙】
ルイ＝ガブリエル＝ウジェーヌ・イザベイ《テュイルリー宮殿庭園のマティルド皇女》1855年　油彩 / カンヴァス　山寺後藤美術館
《イヴニング・ドレス》1860年頃　絹、レース　文化学園服飾博物館　写真撮影：安田如水（文化出版局）
エミール・ガレ《スグリ文香水瓶》1900-1904年
エドゥアール・マネ《ベンチにて》1879年　パステル / カンヴァス
《イヴニング・ドレス》1923年頃　絹（ベルベット）、金属糸、ビーズ　文化学園服飾博物館　写真撮影：安田如水（文化出版局）
ジュール・パスキン《ギカ公女》1921年　油彩 / カンヴァス　公益財団法人ひろしま美術館
《金属ベルト付５種入りコンパクトケース》1920-1950年
【裏表紙】
ピエール・ボナール《浴槽、ブルーのハーモニー》1917年頃　油彩 / カンヴァス
《花文洗面セット》1910年代　マクシミリアン・ド・ベティニー社

＊所蔵の記載のないものは全てポーラ美術館及びポーラ文化研究所